効力は低く、pp'-DDT には抵抗性と認められる。しかし、pp'-DDT を 16.7% しか含まない DDT 残滓の 5% 油剤 (pp'-DDT 含量 0.835%) の効力は、通常の Technical DDT よりさらに強く、これと、0.2% γ -BHC との混合剤は、極めてすぐれた効力が認められた。なお、この系統には、Dieldrin あるいは、DDT・Diazinon 混合剤が有効であつた。Technical DDT が淘汰した場合、その中の pp'-異性体には抵抗性になるが、op'-異性体の多い残滓には、感受性が強いのは注目すべきことだろう。また、彦根系のハエを、粉剤、1 平方メートル当り 7.5 g 相当の撒布量 (基準量) によつて実験し、時間一落下仰転虫数率を求めてみると、1% Diazinon 粉剤は極めて有効で、10% DDT・0.5% Diazinon 混合粉剤もすぐれ、10% DDT・0.5% γ -BHC 混合粉剤がこれについている。彦根から採集し、薬剤との接触なく、そのまゝ 80 代累代飼育したものは、採集後、1~2 代の頃に比べて、 γ -BHC に対する抵抗性が低下し、 γ -BHC と 10 代の間淘汰を続けてきたものは、 γ -BHC に、ますます、抵抗性を増していることが認められた。(予研・衛生昆虫)

各種試験法の殺虫剤効力評価に及ぼす影響(予報): 鈴木 猛・遠山輝彦・尾崎博 Suzuki, T., Tōyama, T. & Ozaki, H.: Studies on the affects of different test method to the estimate on the efficacy of insecticides (Preliminary Report)

殺虫剤のいわゆる残留効果について、その効力評価に及ぼす各種試験法の影響について、予報として報告する。残留効果の評価にあたっては、撒布対象における薬剤の残効性以外に、撒布面に対する昆虫の動態が大きな要因をなしている。それらの各種要因のうち、残留した薬剤に触れてノックダウンしたイエバエの蘇生の問題と、薬剤を撒布した面に対するイエバエの忌避性をとり上げて若干の実験を行つた。この蘇生の傾向は DDT に著しく、リンデンでは少い。しかし、イエバエを個別に薬剤で処理した濾紙をおいて試験した場合には、DDT 及びリンデンの何れにおいても蘇生の現象が認められ、デイルドリンとダイアジノンは殆んど認められなかつた。(伝研・寄生虫)

紙 上 発 表

船舶内に於けるゴキブリ類、特にチャバネゴキブリの棲息実態に就いて: 人見勝 Hitomi, M.: A research on the actual condition of cockroaches living in the vessel, chiefly *Blattella germanica* L.

1953 年 4 月から 1955 年 11 月迄の 2 カ年半に亘り船内に棲息するゴキブリ類の採集調査とチャバネゴキブリの船内棲息実態調査を実施した。船舶内で発見採集されたものはワモンゴキブリ *Periplaneta americana* Linnaeus、コワモンゴキブリ *Periplaneta australasiae* Fabricius、チャバネゴキブリ *Blattella germanica* Linnaeus、イエゴキブリ *Stylopyga rhombifolia* Stoll、ハイ、ロゴキブリ *Nauphoeta cinerea* Olivier、オガサハラゴキブリ *Leucophaea surinamensis* Linne. の 6 種類で、邦産家住性種として知られているクロゴキブリ *Periplaneta japonica* Karny 等は船舶内では全く発見されなかつた。6 種類のうちチャバネゴキブリ、ワモンゴキブリ以外の 4 種類はその棲息数極めて僅少であり、又比較的多数棲息するワモンゴキブリは棲息場所が船倉に限局されているので、その数最も多く、棲息場所が居住区(庖厨、配膳室食堂、属員室、士官室客室、食糧庫を含む)であり船内生活者と最も密接な関係を持つ昆虫としてチャバネゴキブリのみを観察の中心とした。チャバネゴキブリの実態調査は 1954 年 11 月から 1955 年 11 月迄の 1 年 1 カ月間の調査を纏めたものであるが、単族駆除の目的で実施された青酸ガス燻蒸の際発見されたチャバネゴキブリの数を棲息数と見做した。調査船舶数は 120 隻、発見虫数は 719801 匹を数えた。平均棲息数を季節別に調査したが春 (6555 匹)、夏 (6401 匹)、秋 (5699 匹)、冬 (4414 匹) の順位となり冬季に於てもなお平均数 4414 匹を数えた。之を室別に見れば庖厨 (66.94%)、配膳室食堂 (17.11%)、属員室 (7.61%)、食糧庫 (6.76%)、士官室客室 (1.38%) の順位となり、船種別に見れば 1 年以内 (717 匹)、1 年—3 年 (5308 匹)、3 年—5 年 (6421 匹)、5 年—10 年 (3849)、10 年以上 (6707 匹) となつた。なお前回の青酸ガス燻蒸から今回の同燻蒸を実施するまでの期間が本虫の棲息に及ぼす影響を調査したが 6 カ月以内 (5415 匹)、6 月—1 年 (7053 匹)、1 年—2 年 (5115 匹)、2 年以上 (2989 匹) の成績となり燻蒸後の経過期間と本虫の棲息数は必しも比例しない事を認めた。其他航路別による影響を調査したが台湾、沖縄、朝鮮方面 (1892 匹)、北米、濠洲、欧洲航路 (4585 匹)、東南アジア、中近東及アフリカ方面、中南米航路 (8618 匹) の順位を示した。国籍別